入院生活を体験して

一時よくなっていた腰痛が悪化し、痛みやしび痺れに悩みながらも痛み止めの座薬を使い、鍼灸（しんきゅう）に通ったりして診療に従事していた。

＜椎間板（ついかんばん）ヘルニアによる座骨神経痛＞と自分なりに診断してそっと整形外来で牽引（けんいん）をしていたが、右の下肢の痺れが強くなり、筋肉の萎縮（いしゅく）が見られるようになったので整形のドクターに相談に行くと、ミエログラフィー(脊髄造影)をするように勧められた。脊髄に造影剤を注入してエックス線撮影をする検査で、痛みと、多少危険も伴うと聞かされていたため、ずるずると避けていたのである。

しかし、痛みと痺れに我慢できない状態になり、思い切って検査を受けることにした。検査を終え、ドクターに「これだけの圧迫があれば手術したほうが・・・」と言われ「やはり・・・」と不安に駆られながら「明日、手術を受ける」と家に電話を入れた。

「検査だけで心配ないから」と言っていたので、あまりにも急な話に困惑しながら妻が心配して駆けつけてきた。検査次第で、悪ければ手術をするつもりでいたので決心するのにためらいは無かったが、検査の後翌朝まで安静を強いられ、ベッドで動けないという苦痛をまず味わうことになった。

次に待っていたのは浣腸処置で、術前処置は麻酔をしてからするようにお願いしていたので安心していたが、こればかりはそうはいかず受けなければならなかった。普段何気なく患者さんに対し指示している浣腸が、どんなものかということを身をもって体験させられた。患者さんには、なるべく我慢できるまで待ってトイレに行くように話していたが、浣腸液が注入されると、とても我慢等できずにトイレに走ってしまった。それでも導尿カテーテルは「麻酔してから」と頼んであったので、その苦痛を味わうことなく手術場に向かったが、術後の厳しさについては想像すらしてなかった。「3 週間もすれば仕事もできるだろう」と軽く考えていたがとんでもない話で、ギプス固定できない 1 週間の間、ベッドから起き上がることもできず、どんよりした新潟特有の灰色の雪空を見て過ごさなければならなかった。

それどころか＜寝たきりの生活＞がどんなものか、嫌というほど味わうことにあったのである。

ベッドに寝たままでの食事、味噌汁などはストローで何とかできたが、口に運ばれて食べさせてもらう食事は美味しくないものだとつくづく思った。それよりも困ったのは排便・排尿処置だった。同じ職場ということもあって、看護婦達にお願いすることをためらい、家内に任せた。泊まって看護してくれていた間はよかったが、家内が子ども達の世話もあるため通うようになってからは、便意を催しても我慢するしかなく、辛い思いをすることもあった。

自分が体験した辛い思いとは別に、24 時間患者さんの看護をする看護婦達の姿を見て、医療現場の厳しさを患者という立場で見直す機会ともなった。また、寝た状態で看護婦や医師と話していると、その時の目線の位置で、想像していた以上の威圧感を受けるものだということも感じさせられた。

数週間の入院生活であったが、多くの人のお世話になり、色々学ばせていただいた。家族はもとより、病院関係者の善意の中で入院生活ができたことに言葉で言い尽くせない感謝を抱いている。